



TITLE:

「郭璞」説話の形成

AUTHOR(S):

大平, 幸代

CITATION:

大平, 幸代. 「郭璞」説話の形成. 中國文學報 1999, 59: 1-33

ISSUE DATE:

1999-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177846>

RIGHT:

「郭璞」説話の形成

大 平 幸 代

奈良女子大學

「六朝志怪」とよばれる説話の多くは實際の人物や事件に取材している。「怪」である以上、非日常的な出来事であるに相違ないが、それらの「怪」はいかに突飛であれ、現實社會と何らかの關わりを持つている。『隋書』經籍志にその源を「史官の末事」とし、唐修『晉書』が列傳の中に志怪の説を取り入れたのも、それら「虚誕怪妄の説」の中にも一概にでたらめだと切つて捨てられないものを認めていたからに違いない。そもそも、「怪異」と一言でいっても、腐草が螢になることから、鬼神を見ること、不死の體を手に入れることまで、その中身は實に多様である。それらは不可思議の程度においてさまざまであるが、すべてありうることなのであり、人々の意識の中では不可知な世

「郭璞」説話の形成（大平）

界としてつながっている。例えば、葛洪の論理に従えば、雀が海に入つて蛤となり、男が女に變わることもありうるのだから、仙人になることも不可能とは言えないということになる。^① 甲がありうるなら、それより少し不思議な乙もありうる、乙がありうるなら、さらに不思議な丙もありうるといったふうに連鎖はどんどん廣がつてゆくのである。では、それらの「怪」が特定の人物と結びついた時、はたしてどのように語られ、また受け止められたのだろうか。「怪」を語ることとはどのような意味を持ち、それを語る人々の意識といかに結びついていたのだろうか。

ここにとりあげる郭璞は六朝文人の中でも飛びぬけて多くの逸話をもつ人物である。また、その話の荒唐無稽さも群を抜いており、『晉書』の本傳などはまさに怪異譚の集成だといえる。^② だが、注意を要するのは、それらの説話が一時に形成されたものではなく、徐々に新たな形象を獲得しながら積み重ねられたものであるという點である。『晉書』はこれらの説話を出來事の順を追つて並べているわけだが、今日われわれが説話の形成のされかたを考える場合、

可能な限り語られた順に並べ替え、どのように虚構が進んでいったかを考へねばなるまい。例えばこんな話がある。

行至廬江、太守胡孟康被丞相召爲軍諮祭酒。時江淮清宴、孟康安之、無心南渡。璞爲占曰「敗」。康不之信。璞將促裝去之、愛主人婢、無由而得、乃取小豆三斗、繞主人宅散之。主人晨見赤衣人數千圍其家、就視則滅、甚惡之、請璞爲卦。璞曰：「君家不宜畜此婢、可於東南二十里賣之、慎勿爭價、則此妖可除也。」主人從之。璞陰令人賤買此婢。復爲符投於井中、數千赤衣人皆反縛、一一自投於井、主人大悅。璞攜婢去。後數旬而廬江陷。

廬江に行くと、太守の胡孟康は丞相に召されて軍諮祭酒になっていた。そのころ江淮の間はやすらかであったので、孟康は満足し、江を渡つて南にいく氣がなかった。璞が占つて「敗」と言ったが、康はこれを信じなかった。璞は旅装を整えて去ろうとした。主人の侍女を愛幸していたが、自分のものにする手立てがなかった。そこで小豆三斗を取り、主人の屋敷のまわり

にばら撒いた。主人は朝、赤い着物をきた數千の人が家を取り圍んでいるのを見たが、近づいてよく見ようとすると消えてしまった。非常に氣味悪く思つて、璞に卦を出してもらうよう頼んだところ、璞は言った。「あなたの家にこの侍女を置いておくのはよろしくございませぬ。東南二十里のところでお賣りなさい。値段を交渉してはいけません。そうすればこの異變は除かれましょう。」主人はこれに従つた。璞はこつそりと人を遣わして安値でこの侍女を買わせた。また、お札を井戸の中に投げ込むと、數千の赤い着物の人はみな後ろ手で縛られて、一人一人井戸の中に飛び込んだ。主人はたいそう喜んだ。璞は侍女をつれて去つた。數十日して廬江は陷落した。

この話が語られたとき、郭璞が既に「色を好む」「幻術を操る」という二重のイメージを背負っていたことは明らかである。「好色」については干寶が郭璞を諫めたという話も残つており、郭璞は酒色と切り離せない放蕩な人物だと認識されていたことが分かる。さて、一方の「幻術」が、

これから小論のなかで考察していこうとする問題である。

郭璞は筮占に秀でた人物であるから、もとより怪異とは結びつきやすい。不可思議の世界の連想が郭璞という人物に適用されれば、仙人になることも、幻術を使うことも不自然ではないだろう。だが、一介の卜者がみな幻術使いになるわけではない。また、郭璞個人について考えてみても、はじめから幻術と結びついていたとは思えにくい。むしろ、郭璞の虚構化は徐々に行われていったのであり、そこには郭璞を並の卜者以上にする何らかのきっかけと、それに關わった人々の意圖が存在したと考えるほうが自然だろう。そして、それら段階的な郭璞像の廣がり「郭璞」を少しずつ現實から乖離させ、最終的に『晉書』に見られるような雑多な郭璞説話を作り上げたのであろう。そこで、小論では郭璞の形象がどのように作られたのか、一旦確立した像の上にどのように別の像が附け加わっていったのかを見てゆくことにする。

郭璞をめぐる説話については、これまでも論じられているが、大別すれば二つに分けられる。一つは説話を史料

「郭璞」説話の形成（大平）

としてみるもので、「これらの説話によって郭璞の足跡を推測するのは信憑性に缺ける」という曹道衡氏の言に代表される^④。もう一つは、説話が虚構であることを認めた上で、それらの説話が語られた社會をみようとする態度であり、興膳宏氏は「郭璞に關する非合理的説話も、非合理性のゆえに一笑に附すべきではなく、それらが史實として定着され、人々の腦裏に郭璞のイメージを規制した背景をこそ私たちは注意深く見ておく必要があるだろう。」とされる^⑤。

小論は後者の立場による。同じく興膳氏の言を借りれば、「説話が生まれるに際しては、それを生み出すだけの社會的な母胎が不可缺であり、ある人物に關する説話が傳わるには、その人物の人格、あるいは社會がかれについて受け止めた印象といった要因がさらに必要となってくる」と考えるからである。ただ、興膳氏の論考が郭璞という「人物の性格」の考證を中心にしたものであるのに對して、小論は「社會的な母胎」から説話を捉えることに重點を置く。以下の考察は、いわば、説話はどのように形成されるのか、それに關わる人々はどうのような意識を持つて怪異を語るの

かを探るための一つの試みである。

一 東晉中興と郭璞

『晉書』郭璞傳によれば、郭璞は郭公なる人物から『青囊中書』九卷を授かり、「五行、天文、卜筮の術」に通じようになつたという。「攘災轉禍、通致無方、雖京房・管輅不能過也。（災厄を攘い禍を福に轉じて、あらゆる事に相當の實力である。璞はその卜筮によつて故郷河東から戰亂を避け江南に渡つた。『晉書』並びに二十卷本『搜神記』にはこの南遷の途中、術を使つて張固の馬を生き返らせた話、先に引いた胡孟康の婢を手に入れた話を載せる。だが、これはいかにも荒唐無稽であるうゑに、本來の『搜神記』にあつたものかどうかさへ疑わしい。郭璞『洞林』^⑦によれば、卜筮によつて江を渡つたには違ひないが、その途上で行われたのはもっぱら『易林』による行き先の占ひであつたという。結果的に占は適中しているものの、當初は

便以林義通示行人、說欲從此道之。咸失色喪氣、无有

讀者。或云：「林殆誤人、不可輕信。」

そこで『林』の意味を旅人に説明し、この道を通つていこうと思ふといつた。みな顔色を失つて意氣阻喪し、贊同してくれるものがなかつた。『林』はわれわれを誤らせようとしているのだから。輕々しく信じてはいけない。」という者もいた。

というありさまであつた。まだ、郭璞の占いは絶對的な信賴を勝ち得ていなかったわけである。

では、いつから郭璞の占いは必ず當たると信じられるようになったのだろうか。

「璞之交筮、雖京房・管輅不過也。（璞の筮占は、京房・管輅でもかなわないほです。）」（『晉書』卷七六王廙傳）と斷言したのは王廙である。王廙は中興の功臣王導の從弟であり、この言葉も王導の「晉陵有金鐸之瑞、郭璞云必致中興。（晉陵に金鐸の瑞兆が現れたが、郭璞は必ず中興が成し遂げられると言つた。）」という發言を受けて「明天之曆數在陛下矣。（天命は陛下に下されている。）」ことを主張するための伏線であつた。つまり、元帝即位前夜、郭璞は王導ら政治の中

樞を掌る人物と接觸をもち、「中興」に一役かっていたのである。とすれば、まず、中興をめぐる元帝周邊の動きをたどらねばならない。

のちの元帝、司馬睿が安東將軍・都督揚州諸軍事として建鄴に入ったのが三〇七年。三一〇年に吳興の亂を平定、三一一年には江南に勢力を誇っていた周馥を破る。西晉の都洛陽が劉聰に占據されると、荀藩らが司馬睿を推戴して夷狄に當たろうとの檄を飛ばした。ここにきて司馬睿の地位は上昇し、北方の人士が續々と南に下った。三一三年、長安で愍帝が即位すると司馬睿は右丞相に任じられる。三一四年、江南の豪族周勰の反亂を鎮壓。三一六年愍帝が長安で劉曜に捕らえられ、翌三一七年司馬睿は晉王となった。劉琨、段匹磾が勸進の表を奉ったのがこの年である。同十二月愍帝が弑逆され、三一八年司馬睿はついに帝位につく。以上が、即位にいたる大まかな経緯であるが、郭璞はこの一連の動きの中で主に中興の瑞をめぐる問題に關わっている。よって、次節以下しばらく輿論操作、廣報活動に焦點を當てて中興前後の動きを追ってみる。

〔郭璞〕説話の形成（大平）

(1) 符瑞 合 載

帝位につくからには天命が己にあることを表明しなければならぬ。帝位につくのにふさわしい特別な人間であること、天がそれを認める徴候を提示していることが必須である。もちろん、これには古來のマニユアルがある。「中興とはいっても、實際には受命である」東晉には後漢という格好のモデルがあつた。例えば、誕生の際の様子について、『東觀漢記』並びに『晉中興書』に

建平元年十二月甲子夜上生時、有赤光、室中盡明。皇考異之、使卜者王長卜之。長曰：「此善事不可言。」

（『東觀漢記』世祖光武皇帝紀）

建平元年十二月甲子の夜、（光武）帝ご生誕の折、赤い光が部屋の間々までを明るく照らし出した。先帝はこれを奇異なことだとされ、卜者の王長に占うようにご命じになった。長は「この素晴らしいことといったら言葉に出来かねるほどでございます」と言った。

初誕、有神光之異、一室盡明、所藉藁如始刈。（『藝文

類聚』卷二三引『晉中興書』

(元帝が)お生まれになると、不思議な光が現れて、部屋中が明るくなり、敷いていた藁は刈ったばかりのようであった。

というほか、「殆んど人臣の相に非ざる」風貌についても兩書ともに言及している。また、天意の反映である瑞兆についても『東觀漢記』に、「是歲嘉禾生、一莖九穗、大於凡禾、縣界大豐熟、因名上曰秀。……在春陵時、望氣者蘇伯阿望春陵城曰：『美哉。王氣鬱鬱葱葱。』」(この年、嘉禾が生えた。ひとつの莖に穗が九つあって、ふつうの禾より大きく、縣内は非常に豐作であつた。そこで(光武)帝は秀と名づけられたのであつた。……春陵にいらつしやる時、望氣者(氣を見ることのできる者)の蘇伯阿というものが、春陵城を望み見て『素晴らしいことよ！王の氣がさかんに立ち上つてゐる』と言つた。)」というのに對し、類似的の記述が『晉書』五行志、『宋書』符瑞志(後述)でも隨所に見られる。

だが、この時期、それを利用したのは司馬睿だけではない。同時期の北方にも次のような誕生祕話が生まれている。

初、聰之在孕也、張氏夢日入懷、寤而以告、元海曰：「此吉徵也、慎勿言。」十五日而生聰焉、夜有白光之異。形體非常、左耳有一白毫、長二尺餘、甚光澤。

(『晉書』卷一〇二劉聰載記)

聰を身ごもつたとき、母の張氏は太陽が懷に入るのを夢みて、目覺めてからそのことを告げた。父の元海は「これは吉祥である。決して人に言うでないぞ」と言つた。十五ヶ月たつて聰を生んだ。その夜、白い光が現れるという不思議な現象がおこつた。體つきは凡人と異なり、左耳に二尺餘りの非常に光澤のある白毫が生えていた。

もちろんこれらは歴代の帝王紀に散見される、いわば必須のアイテムなのであり、劉氏父子に限らず北方に覇をとなえた人物ならばみな同じような逸話を持つてゐる。^⑨江南の地に立つとする司馬睿側もこれらに對抗できるだけのものを創り出さねばならなかつたわけである。差別化を圖るにはより説得力のある瑞徵があればよいのだが、瑞兆のパターンに限りがあり、誰もがそれを用いるとすれば、重點

をその現象をいかに解釋し、いかに表現するかに移さねばなるまい。また、その際には、符瑞を天意として解釋する人間が不可欠である。光武帝の下には望氣者蘇伯阿や道士西門君惠・李守等^⑩がいたが、元帝司馬睿政權においてその役目を擔ったのがほかならぬ郭璞なのであった。先に引いた「晉陵に金鐸の瑞有り、郭璞 必ず中興を致すと云う」というのがその一例である。

(2) 中 興 劇

郭璞の符瑞解釋については後で見ることにして、ひとまず役者が出そろったところで、この中興劇の演出家について考えてみたい。先に引いた王廙の發言の前には次の一節がある。

及帝卽位、廙奏中興賦、上疏曰……又臣昔嘗侍坐於先后、說陛下誕生之日、光明映室、白毫生於額之左、相者謂當王有四海。又臣以壬申歲見用爲鄱陽內史、七月、四星聚于牽牛。又臣郡有枯樟更生。及臣後還京都、陛下見臣白兔、命臣作賦。時琅邪郡又獻甘露、陛下命臣

嘗之。〔晉書〕卷七六王廙傳〕

帝が卽位されると、廙は中興の賦を奏上し、上疏してこう言った。「……また臣が昔、今は亡き母后にお仕えしておりましたとき、こうおっしゃいました。陛下がお生まれになったとき、光明が室を照らしだし、白毫が額の左に生えており、人相見が「きつと王となつて天下を手になさるにちがいありません」といった、と。また臣は壬申の年に徵用されて鄱陽内史となりましたが、七月に四星が牽牛に集まりました。また臣の郡に枯れたクスノキが蘇生するということがありました。臣がその後、京都に歸りましたとき、陛下は臣に白兔をお見せくださり、賦を作るようにとご命じになりました。ちょうどその時、琅邪郡がまた甘露を献上してきましたので、陛下は臣にこれを嘗めるようにと命じられました。

これによれば元帝の出生祕話は王廙が先后から聞いたものであり、「四星聚于牽牛」や「枯樟更生」は王廙自身の報告、そして甘露を獻じたという琅邪郡は王氏のお膝元であ

る。なお、臧榮初『晉書』（「類聚」卷一〇引）によれば、王敦の勸進の表には「皓獸應瑞而來臻、樟樹久枯而更榮。（白いけものが瑞命に應じてやつて來、久しく枯れていたクスノキが葉を茂らせた。）」という一節があったという。また、王敦自身も、二度にわたって「木連理」の出現を奏上し、司馬睿の王者の徳を強調している。王導、王廙、王敦が一團となり、瑞兆を理由に元帝即位の正當性を強調していることはもはや明らかであろう。

元帝が江東に據點を構えたときの状況を「王と馬と天下を共にす」（『晉書』卷九八王敦傳）と言うが、「今の元帝中興の業、實は王導の謀なり。」（『晉書』卷二九 五行志下）というように王導が主導権を握っていたというのがより實情に近い。そもそも元帝が晉王となりやがて帝位についたのは八王の亂を経て晉王朝の血筋を引く人間がほとんど残っていないなかった「宣帝の胤、惟だ陛下のみ有り」（『晉書』卷六元帝紀 劉琨等 勸進表）という僥倖による。とりわけ、江を渡った當初、司馬睿の存在感はまことに微弱なものだったらしく、『晉書』王導傳に見える王敦の威勢をかり

てやつと江南貴族の信頼を集めたという話は實話ではないにせよ、當時の江南の實態を反映しているとみてよい。¹³その司馬睿を盛り立て帝位につけたのが江南の管仲こと王導なのだが、たくみに江南貴族を味方につけた王導だけあって、中興を盛り立てる輿論を作り上げる事にも抜かりはなかった。次に、その例として、『宋書』符瑞志に記載される瑞祥を見てみよう。¹⁴

瑞兆の出現は愍帝の建武元年三月、すなわち司馬睿の晉王即位をさかいに南に移っている。「晉愍帝の建武元年三月己酉の日、丹陽江寧の民・虞由が土を耕していたときに一紐の白麒麟の璽を見つけた。『長壽萬年』の文字があった。晉王に獻じた。」「晉愍帝の建武元年四月、尚書僕射の刁協が白孔雀を晉王に獻じた」、といった具合に司馬睿が晉王となると同時に瑞祥が續々と報告され始めたのである。『晉書』元帝紀に、「時に四方 競いて符瑞を上る」とあることから見て、實際に報告された瑞兆の例は今記録に残っている数よりはるかに多かったに違いない。恐らく「及中興建、帝欲賜諸吏投刺勸進者加位一等、百姓投刺者

賜司徒史、凡二十餘萬。(中興が成立すると、帝は名札を差し出して卽位を勧めた役人には一等を加え、名札を差し出した庶民は下役人にしようとした。その數、あわせて二十餘萬であつた。)(『晉書』卷七一熊遠傳)という記録に見える大規模な勸進の動きの一環だったのだろう。司馬睿の天下になりそうだと見て取るや人々は利を求めてその幕下に馳せ参じたのである。

ところで、ここで注目すべきなのは、それらの動きにやや先だつ愍帝建興二年十二月晉陵武進縣の民陳龍が銅鐸を獻じていることである。實はこれは郭璞『洞林』によれば子の年、つまり建興四年(三一六)のことだ^⑮というが、いづれにせよ、江南の「諸史百姓」がこぞって符瑞を報告するに先だつて郭璞がその出現を豫言していたことに違いはない。しかも、銅鐸の發見は中興の徴として必ず引き合いに出される大事件なのである。

今見たように、王導らに組しようとする者は競つて瑞祥を報告しているが、それらがどれだけ有效なものだったかは疑問としなければならない。中には牽強附會の説も少な

からずあつたものと想像されるからである。事實、五行志には、「腹心合同」の子供の誕生を「木連理」と同じく瑞兆として報告し失笑をかつたひとの話を載せる。もちろん、中興の氣運を盛り立てるといふ點においては數の多さがすでにその成功を意味しているのだが、いつ誰が見ても納得のいく「記録」を残すということまで考えるとやはり數だけでは充分とはいえない。符瑞がより説得力を持つためには、いかにも「中興の徴」だと思わせる象徴的な事象がなければならぬ。晉陵の銅鐸はこの點申し分ない條件を備えていた。次に必要なのは、この銅鐸が「中興の徴」だと人々を納得させることである。言うまでもなく、「中興の徴」の解釋にはそれなりの知識と權威が必要となるが、とりわけ皇帝の立場が不安定な草創期にはそれが瑞兆である事を確かに保證できる人物を缺くことができない。郭璞の存在意義はまさにここにあつたのである。

(3) 郭璞の占とその後援者

では郭璞の中興をめぐる發言をみてみよう。『洞林』に

よれば、郭璞は司馬睿の晉王即位前一年間の異事を晉陵令淳于伯の「血逆の變」を除いてすべて占い得たという^①。郭璞は筮占により「咸の井に之く」の卦を得た。そこから導き出された豫言とは、東北の「武」のつく郡縣で六つの銅鐸が発見され、そのうちの一つには龍虎の模様があること、犬と豚が交わること、民が「水妖」を警戒すること、西南の「陽」のつく郡縣で井戸の水が湧きでること、虎が州城の役所に入ってくることに、東方に蟹と鼠が現れて災害をなし、稻を食らうこと、鷺鳥が羽ばたくことである。郭璞はそれらにいちいち理由をつけているが、ここでは先にふれた晉陵武進縣の銅鐸の解釋をみることにする。

其年晉陵武進縣民陳龍果於田中得銅鐸六枚、言六者用坎數也。銅者咸本家兌故也。口有龍虎文。又得者名龍、益審陳土姓金之用也。進者乃生金也。

その年、晉陵武進縣の民陳龍が豫想通り田の中で六箇の銅鐸を見つけた。六というのは坎の數を用いているのである。銅というのは咸の本家が兌であるためである。口に龍虎の文様があり、また得た者の名が龍であ

るのは、ますます陳が土姓であつて金を生み出すのを明らかにしている。(武進の)進はつまり金を生じるということである。

ここから郭璞の解釋が數字・方位・地名にまでいちいちに意味を與える周到なものであったことがわかる。發見者の名前や銘文などできすぎではないかと思うほど完璧な瑞兆である。『洞林』には更に會稽郡で見つかった鍾のことも述べ、「觀鐸啓號於晉陽、鍾告成於會稽、瑞不失類、皆出以方、豈不偉哉。(鐸が晉陽ではじめに合圖し、鍾が會稽で成功を告げたのを見れば、瑞祥は類を失わず、すべて適切な方向に出現している。なんとすばらしいことではないか!)」と嘉瑞の効果を一層際立たせている。實に「古國徵瑞の事に通ず」(『洞林』)る郭璞ならではの技である。

郭璞の中興をめぐる發言はこれにとどまらない。何法盛『晉中興書』(『太平御覽』卷一〇〇引)には次の記載がある。

昔中宗以丁丑之歲始稱晉王、改築宗廟、使郭璞筮之、云載祀二百。暨今禪代庚申之歲、凡百有二年、而天祿永終。璞精於數術、理無乖二、抑以百四期促、故謬其

嗣爲二百乎。

昔、中宗（元帝）は丁丑の歳に始めて晉王を稱し、宗廟を改築した。郭璞にこれを占わせたところ、二百年お祭りすることになるでしょうと言った。今王朝を譲った庚申の歳におよぶまで、あわせて百二年で、天から與えられた幸福も永遠に盡きてしまった。璞は數術に精通しておりその理がたがうことはない。そもそも百四では短いので、わざと誤って二百年續くといったのだろうか。

ここからも郭璞の數術に對する信賴の強さがうかがえよう。「理 乖二無し」という信念は現に豫言した數字が誤っているという事實をねじまげるまでに強固なのである。

ところで、何法盛の記述のなかでもうひとつ見過ごせないのは、不都合な豫測ならば故意に改竄することもありうるといふ指摘である。郭璞が體制に組み込まれた卜筮家だったことは今まで見てきた通りであるが、彼が占うのはあくまで中興の徵であって、その逆ではありえない。つまり、郭璞が中興の徵を占い、王導・元帝側がそれをバック

「郭璞」説話の形成（大平）

アップするという相互扶助によつて、「郭璞」の占の權威（「中興の豫言」）はゆるぎないものと認識されていたのである。

ではこのような相互扶助の關係はどのように成り立っているのだろうか。それを確かめるために、ここで卜者と士大夫の關係について見ておこう。當時、卜者は士大夫と密接な關係にあり、彼らのために吉凶を占い病氣の治療をした。例えば、王導には次の話がある。

丞相王導多病、毎自憂慮、以問訓。訓曰：「公耳豎垂肩、必壽、亦大貴、子孫當興於江東。」咸如其言。

（『晉書』卷九五藝術傳陳訓傳）

丞相の王導は病がちで、いつも氣に病んでいたの、このことを陳訓に尋ねた。訓はこう言った。「公の耳は長く肩まで垂れています。きつとご長壽で、また非常に高貴なご身分になります。ご子孫はきつと江東で繁榮されるでしょう。」すべてその言葉どおりだった。

また『晉書』藝術傳には戴洋による王導の病氣治療の話も

みえる。これらの記載から王導には何人かのおかかえ卜者がいたことが分かるが、これは王導に限ったことではない。同じく『晉書』藝術傳によれば、もう一人の要人庾亮も、戴洋、吳猛といった術士に病や氣候（氣の變化）を占わせていたという。また、郭璞が江を渡った直後に仕えた宣城太守殷祐も卜筮の士を重用していた。なお、璞が仕える以前殷祐の下には同じく藝術傳中の人物韓友がいたが、この韓友も後、元帝に取りたてられている。こう見てくると、元帝をとりまく政治家集團の間に渡り歩き重用された卜者がいたことが分かる。元帝、王導、庾亮ら中興を成し遂げた集團の中に卜筮の士も組み込まれていたと言ってもよい。郭璞も彼らと同じく病氣治療や家運の占いをしていたらしく、丞相掾桓彝の嫂、揚州別駕顧球の妹の病を治したことが『洞林』に見える。また、史書の記載によると、王氏や庾氏の家運も豫言したという。例えば、その一つに、『淮水 絶えなば、王氏 滅びん。』（『晉書』卷六五王導傳）という言葉がある。この占言は『南史』（卷二四王導傳論）では陳滅亡の年淮水が絶え王氏が滅んだことを言うとするが、

それ以前においては『晉書』に「其の後 子孫 繁衍すること、竟に璞の言の如し」というように王氏繁榮のしるしととられていたに違いない。とすれば、「郭璞」は一族の繁榮を保證するものとして機能していたことになる。その家運についての占いが家の中で伝えられていく限り、そしてその一族が榮えている限り、郭璞の地位は安泰だったのである。

逆に言えば、そういう後ろ盾を持たなければ術士として窮めて不安定な立場に居らざるを得ないということになる。彼らの術は、評價する人間の立場によつて「神術」とも「妖術」ともなるからである。一例を挙げよう。

主簿王振以洋爲妖、白（祖）約收洋、付刺姦而絶其食五十日、言語如故。約知其有神術、乃赦之而讓振。

……（陶）侃薨、征西將軍庾亮代鎮武昌、復引洋問氣候。……庾亮曰：「有之、君是神人也。」（『晉書』卷九

五藝術傳戴洋傳）

主簿の王振は戴洋を妖人だと思い、（祖）約に申し上げて洋を捉えさせ、刺姦（軍中の取締をする役人）のも

とに送って五十日間食べ物を與えなかったが、言説はもとの通りだった。約は洋が神術をもっているのを知り、そこで洋を解き放って振を責めた。……(陶)侃が亡くなると、征西將軍の庾亮が代わって武昌に鎮し、また洋を召して氣の動きを尋ねた。……庾亮は言った「その通りだ。君はまことに神人だ。」

また、術士は政治闘争とも無縁ではなく、極端な場合、命さえ落としかねない。

札一門五侯、並居列位、吳士貴盛、莫與爲比、王敦深忌之。……時有道士李脫者、妖術惑衆、自言八百歲、故號李八百。自中州至建鄴、以鬼道療病、又署人官位、時人多信事之。弟子李弘養徒瀟山、云應識當王。故敦使廬江太守李恆告札及其諸兄子與脫謀圖不軌。(『晉書』卷五八周處傳附札傳)

札の一門の五侯はみな爵位を持ち、吳の士族のいかに高貴で勢い盛んなものでも、比べものにならなかった。王敦はひどくこれを嫌っていた。……そのころ李脫という道士がいて、妖術で民衆を惑わし、自分で八百歳

〔郭璞〕説話の形成(大平)

だと言って、李八百と號していた。中州から建鄴に至るまで、鬼道によって病氣を治療し、また人に官位を與えたので、當時多くの人が信じて仕えていた。弟子の李弘は瀟山で門人を養成し、李脫は識に従って王となるべきであると言っていた。よって敦は廬江太守の李恆に札とその兄の子たちが脱と謀反をたくらんでいると告發させた。

術士自身民衆を扇動しやすいという點で危険な存在なのだが、李脫の場合は周札一門を討つ格好の口實にされてしまったようである。戴洋は祖約や庾亮に「神」と認められたからこそ、藝術傳に名を残したが、李脫は反對勢力に屬していたために命を落とし、史書に「妖書を造り衆を惑わす」(『晉書』卷六明帝紀)と記されることになったのである。この「妖」というレッテルの恐ろしさを郭璞が知らなかったはずはない。それどころか、郭璞自身、任谷の「妖術」を厳しく弾劾している。任谷は元帝の寵臣であったため、その場は事無きを得たが、帝が崩御するや一目散に宮中から逃げ出した。なお、「妖」の烙印を押された任谷はいっ

からか、蛇を生んで宦者になった化物にまでされている。^{②①}
このように、「術」を扱うひとは確かな後ろ盾を持たなければいつ「妖人」として抹殺されるか分からない状態だったのである。

その點、郭璞は王導・庾亮などといったしつかりした保護者を持っていた。郭璞が占った人物の内、素性が分かる者はすべて王導らと良好な關係を保つ人物である。それらの人々のお抱え占い師的存在だったからこそ、郭璞は「妖」の字を冠せられることがなかったと言えよう。郭璞の卜筮がいくら當たるとはいえ、王氏や庾氏の後援なくしてこれだけの評價は得られなかったに違いない。そして、郭璞がその保護下に居續けるために彼らの意に添う發言をしたであらうことも想像に難くない。

(4) 郭璞の文と符瑞

郭璞が中興に彩りをそえる符瑞解釋を打ち出したことが、王導らの策のひとつだったということは以上確かめてきた通りである。しかし、それだけでは、郭璞でなければなら

ない理由が説明できない。數多の卜者の中から郭璞が選ばれたのはなぜだろうか。

もちろん、ひとつにはその該博な知識によるだろう。『爾雅』『方言』『山海經』『穆天子傳』の注釋という著作の數々をみても古今内外の事物や言語に通じていたことは明らかである。郭璞の發言はそれらの知識に裏打ちされたものであるがゆえに、相當の權威をもっていたはずである。^{②②}
また、郭璞の易解釋は義理易とも融合していたため、玄學を好む王導・王廙らに受け入れられやすかったとも言われる。だが、それだけでもない。その謎を解くもうひとつの鍵はそれら豐饒な語彙に基づいた彼の文筆力にある。自然現象を天意として正しく解釋するには知識が必要だが、それだけではただの「識者」である。さらに重要なのはそれを文字にし當代そして後世の人にしめすことだろう。先に少し觸れた「記録」の問題である。出來事は「記録」することによつてはじめて「歴史」になる。王導が東晉成立まもなく史官をおくよう建議したのもそれを意識してのことには違いない。王導の進言ではじめて史官に任ぜられた干寶

は五行災異の説に精通していたし、ついで郭璞と共に『晉書』編纂を命じられた王隱はその書の中に瑞異をとり入れた。²³ 例えば、王隱『晉書』「石瑞記」には次の記述がある。

永嘉初、陳國項縣賈逵石碑中生金、人盜取盡、復生。

此江東之瑞。（御覽）卷五八九

永嘉の初め、陳國項縣の賈逵の石碑中に金が生じた、人が盗んで取り盡くしてしまつても、また生じる。これは江東の瑞である。

ここからも祥瑞が史書に不可欠なものだと見なされていたことが分かる。今まで見てきたように「江東の瑞」を語ることにかけては郭璞の右に出るものはいない。その上、郭璞には「中興第一」といわれる文才があり、²⁴ 庾亮や溫嶠との交際にも詩文は重要な役割を果たしていたと考えられる。史書と祥瑞と美文、郭璞はそれぞれに優れているだけでなく、その三者を兼備した存在として他から際立っていたのである。そもそも、歴史を記録する人にとって美文をつづる力は不可欠のものと考えられていた。詩賦を認められて史官に任じられた例は枚舉に暇が無い。

【郭璞】説話の形成（大平）

璞著江賦、其辭甚偉、爲世所稱。後復作南郊賦、帝見而嘉之、以爲著作佐郎。（晉書）卷七二郭璞傳

璞が『江賦』を作ると、その文章が非常に優れていたので、世の人々に賞賛された。後、また『南郊賦』を作ったところ、帝が見てお褒めになり、著作佐郎に任じられた。

というように、かくいう郭璞自身もその一人である。

「南郊賦」は元帝が即位に際して天を祭った時の作であるが、晉の中興を壽ぐもので、その文中にはもちろん瑞徴も織り込まれていた。

豫章記曰：松陽門內有大梓樹、大四十五圍、舉樹盡枯死。永嘉中、一旦忽更榮茂。太興中、元皇帝果繼大業。庾仲初楊都賦所云：魂木薈于豫章。郭璞南郊賦云：弊梓擢秀于祖邑也。宣帝祖爲豫章太守、故云祖邑也。

（類聚）卷一〇）

豫章記にいう：松陽門の内に大きな梓の樹があつた。大きさは四十五圍もあつたが、樹全體が枯れてしまつた。永嘉中、一朝のうちに突如としてふたたび葉を茂

らせた。太興中、果たして元帝が大業を繼がれた。庾仲初の楊都賦に「瘠木 豫章に蒼る。」というのがこれである。郭璞の南郊賦には「弊梓 豫章に擢秀す」という。宣帝の祖父が豫章太守であつたので祖邑というのである。

ここでもやはり王敦や王廙が繰り返し述べた「枯樟更生」が取り上げられている。王廙の「白兔賦」の例からも分かるように、文章は符瑞を言葉によつて裝飾すると共に一種の解釋をも示す。瑞祥を報告する際にしばしばそれを壽ぐ文章がつけられているのも、符瑞の効果を高めその意味をいつそう明らかにすることにあつたのだろう。^②郭璞が瑞をうたうこと自體が内容の保證であるが、その上にきらびやかな文辭を驅使することによつて、中興に一層の華やぎと威光を添えることになるのである。とすれば、郭璞の占も文章も表現方法こそ異なれ、目指すものは同じであつたといふことになる。郭璞の詩賦、史書、卜占は、どれをとつても一流であるだけでなく、それらすべてが中興および中興を支える人々につながっている。璞はまさしく東晉草創

期に求められる人材だつたわけである。

以上見てきたことをまとめると次のようになる。王導・王敦ら司馬睿（元帝）擁立一派は古來の符瑞マニユアルに則り、瑞祥を集め記録することに努めた。だが、それにはしかるべき權威をもちしかるべき方法をとる解釋者の存在が不可欠である。當時卜筮の徒は多く、巫術方術によつて民衆を惑わす輩も跡を絶たなかつた。その大半がただのベテン師だつたことは葛洪が『抱朴子』の中であげせる批判^③からも伺われる。それに反し、郭璞は易占に則つた體系的な解釋をし、天文、曆數、古今中外の事物に精通したうえ、華麗に言語をあやつつて中興をたたえる詩賦を詠むこともできた。これ以上の適任者はいないといえよう。郭璞は學識と美文をもつて中興を稱え、王導ら權力者がその能力に公認を與える。そこに、郭璞の占いが當たらぬわけはないという風潮が生まれ、その郭璞が占つた元帝の中興はまぎれもなく天命によるのだという認識が生じる。——こうして「卜筮家郭璞」の名は確かなものとなつた。

かくして卜者としての名聲は高まり、郭璞は政治の中樞に入り込んでいった。だが、才と知名度に反して、その地位は依然として低いままであった。卜者は所詮技術者にすぎず、士大夫の世界とは一線を劃されていたからである。郭璞はもちろんこの状況に満足していたわけではない。だが、その状況を變えるだけの力を持ち合わせていないことを最も痛切に感じていたのも彼であった。「客傲」は人々の嘲笑に答えたものであるが、結局は「此の員策（筮竹）と智骨（龜甲・獸骨）とを玩ぶ」ことを確認して言を結んでいる。卜者としてのイメージだけが一人歩きしていくことへの焦り、抵抗、絶望を経た後、唯一残されたのが卜者たることを肯定する言葉だったのだろう。個人の抵抗は中興という大きな流れの中に吞み込まれてゆくしかなかったのである。その抵抗の跡は遊仙詩をはじめとする郭璞の文章に留められていると思われるが、小論は郭璞個人の心情を越える社會の意向を探ることを目的とするので、この問題については稿を改めて論じたい。

二 王敦の亂

以上見てきたように、郭璞が一躍注目を浴びるようになった契機は元帝の中興神話創作にあった。だが、ここからは、正統の卜者としての郭璞は見えてくるが、超人的な術を使う小説の主人公としての姿にはまだ距離がある。郭璞像を現實から引き離れた要因は他にあるはずである。

郭璞の故事をみると、その多くの部分を王敦にまつわる説話が占めていることに氣づく。よって、次に王敦事件を軸に郭璞を見ることにする。ここでひとつ注意しておかなければならないのは、このとき郭璞は「京房・管輅と雖も過ぐる能わざる」占者という形象を既に獲得している點である。

(1) 王敦の計略

三三二年、劉隗・刁協を重用し皇帝權力を強めようとした元帝側と隙を生じた王敦は長江を下り建康に攻め入った。これより、三三四年二度目の舉兵に敗れ病に没するまでに、

多くの人士が敦の傘下に入ることを餘儀なくされている。郭璞もその一人であった。

郭璞爲尙書郎、大將軍王敦以璞有術、取爲參軍、璞畏不敢辭。〔御覽〕卷二四九引〔晉中興書〕

郭璞は尙書郎であつたが、大將軍の王敦は璞が術を持っていたので、召して參軍にしようとした。璞は畏れて斷ることができなかった。

「璞に術有るを以て」というからには、自軍の士氣を盛り上げる占術を期待していたのだらう。中興神話にかかわつた王敦のことゆえ、郭璞の利用價值は十分認識していたはずである。だが、郭璞の行動は王敦の意に反したものだつた。

王敦取爲參軍。敦縱兵都輦、乃咨以大事、璞極言成敗、不爲回屈。敦忌而害之。〔世說新語〕文學注引〔璞別傳〕

王敦は（璞を）召して參軍にした。敦は都に兵を挙げ、大事を相談した。璞は失敗すると斷言し、その言葉を翻さなかつた。敦は忌みさらつて璞を殺した。

これには、王敦の行爲に對する反發もあるだらうが、當時、郭璞が王敦よりも溫嶠、庾亮側に近い位置にいたことが更に大きな原因だと思われる。『晉書』郭璞傳には次のようにいう。

王敦之謀逆也、溫嶠・庾亮使璞筮之、璞對不決。嶠・亮復令占己之吉凶、璞曰：「大吉。」嶠等退、相謂曰：「璞對不了、是不敢有言、或天奪敦魄。今吾等與國家共舉大事、而璞云大吉、是爲舉事必有成也。」於是勸帝討敦。

王敦が謀反を企てると、溫嶠と庾亮は璞にこれを占わせたが、璞ははっきりと答えなかつた。嶠と亮はまた自分の吉凶を占わせた。璞は「大吉」といった。嶠らは退出すると、互いにこう言つた。「璞がはっきりと答えなかつたのは、言葉にするのがはばかられるからだ。或いは天が敦の魄を奪おうとしているのかもしれない。今、吾らは國家のために共に大事を挙げようとしている、そこに璞が大吉というからには、事を起こせば必ず成功するということだ」と。そこで帝に敦を

討つことを勧めた。

郭璞の占は齒切れの悪いものだったようだが、溫嶠、庾亮は己の「大吉」を信じて王敦を討つことにしたという。はばかりのあることは言えないというのが郭璞の微妙な立場を現していることだけ確認して次に進もう。

(2) 王敦の亂の後始末

王敦の亂の平定後、朝廷では關係者の處置をめぐつて議論が巻き起こった。もとより王敦は逆臣であるから、その一派は手厳しい處分を受け、對立關係にあつたものは加贈された。『晉書』天文志・五行志に王敦反逆の兆が記され、忠義傳に周該・桓雄・韓階・周崎・易雄・樂道融・虞慍ら王敦に逆らつて殺された人々の傳が並んでいることから見て、ここでも王敦の亂の不當性を世に知らしめるための手續きが抜かりなく行われたことがわかる。さて、ここで問題になったのは、たとえ強いられたとはいえ王敦に付き従つた者の處置である。一時的にせよ王敦の下にいたものについては「綱紀（主簿）は除名、參佐（屬官）は禁固」

「郭璞」説話の形成（大平）

（『晉書』卷六七溫嶠傳）ということになったが、これについて溫嶠ならびに郗鑒はつぎのように言っている。

嶠上疏曰：「……且敦爲大逆之日、拘錄人士、自免無路、原其私心、豈遑晏處、如陸玩・羊曼・劉胤・蔡謨・郭璞常與臣言、備知之矣。必其凶悖、自可罪人斯得、如其枉入姦黨、宜施之以寬。」（『晉書』卷六七溫嶠傳）

嶠は上疏してこう言った。「……その上、敦が謀反を起こしたときには、人士を拘束しており、免れるすべがない状態でした。彼らの心の内を考えてみますに、どうして氣を落ち着けていられたはずがございましょうか。陸玩・羊曼・劉胤・蔡謨・郭璞らがいつも臣に話していましたので、このことがよく分かるのです。もし極惡非道な輩ならば、罪人であることは明々白白でございますが、不本意ながら逆賊一派に入らざるを得なかった者たちには、寛大な處置を施すのがよろしいでしょう。」

及鳳等平、溫嶠上議、請宥敦佐吏、鑒以爲先王崇君臣

之教、故貴伏死之節、昏亡之主、故開待放之門。王敦佐吏雖多逼迫、然居逆亂之朝、無出關之操、準之前訓、宜加義責。〔晉書〕卷六七都鑒傳〕

鳳らが討伐されると、溫嶠は議をたてまつつて、敦の佐吏を許すよう願ひ出た。鑒はこう主張した。先王は君臣の教えを尊ばれましたので、死に伏す節義を重んじられました。一方、暗愚な亡國の君は、むやみに猶豫期間をあたえしました。王敦の佐吏はいかに強制されていたとはいえ、逆賊の政權下におり、出關の操もありませんでした。これを前の世の教訓に照らして見ますと、しかるべき責めを負わせるのがよろしいかと存じます。

陸玩・羊曼・劉胤・蔡謨らが罰せられなかつたところからみて、結局、溫嶠の意見が入られたようだが、個々の人物の評價については更にさまざま議論が闘わされたらしく、〔晉書〕周札傳・刁協傳には、追贈すべきか否かをめぐる議論が見える。

ところで、その周札への追贈をめぐる王導と卞壺の議論

のなかに注目すべき箇所がある。周札傳によると、雙方の主張のポイントは、一つには故人の生前の働きの評價、もう一つには褒貶が既に確定している人物との比較にある。具體的に言えば、石頭での戦いの時、門を開いて王敦を招じ入れた周札を、忠臣の周顗や戴若思と同列に扱つていかどうかという問題であつた。「門を開き寇を延」いた責任を追及する卞壺に對して王導は、

論者見姦逆既彰、便欲徵往年已有不臣之漸。〔晉書〕

卷五八周處傳附札傳〕

人は、謀反であることがはっきりしたのを見て、それ以前からすでに臣下にあるべからざる兆しがあつたことを明らかにしようとしています。

今札開門、直出風言、竟實事邪。便以風言定褒貶、意莫若原情考徵也。論者謂札知隗・協亂政、信敦匡救、苟匡救信、姦佞除、卽所謂流四凶族以隆人主巍巍之功耳。如此、札所以忠於社稷也。〔同右〕

今、札が門を開いたというのは、風言に基づいているに過ぎません。一體これは事實なのでしょうか。風言

によつて褒貶を決定するよりは、その情實をはかり徴證を求めるほうがよいと思われまゝ。人は札が隗・協が朝政を亂すのを知り、敦が悪を正し國を救うであらうことを信じていたと言つています。もし本當に惡を正し國を救つて、姦臣が除かれておれば、いわゆる四凶の族を流して主君の偉大なる功績をいっそう盛りたてるといふことになりました。このようにしたのは、札が社稷に忠實だったからなのです。」

と反論する。二人の言葉から見ると、おそらく下輩のように、王敦は生來の逆臣であるという前提の下、王敦に敵對したか協力したかという結果のみで褒貶臧否を決定するのが一般的だったと思われる。王敦の行動の臧否が未だ定まらぬ當時の狀況が考慮されないばかりか、判斷材料そのものも「風言」に過ぎなかつたのである。王導の反駁はその風潮に一石を投じるものであつた。王導は「情を原ね徴を考ふる」ことを提唱し、周札の「情」が「忠」にでるものであることを主張した。王敦をより惡役化し、それと對立する姿を強調する事で「忠義」ぶりを訴えようとする風潮

「郭璞」説話の形成（大平）

の一方で、王敦屬官の處分を巡つてなお模索狀態が続いていたことは押さえておかねばなるまい。

さて、郭璞はいえ、王敦を諫めたのが認められたのか、溫嶠らの口添えが効いたのか、弘農太守を追贈されている。

左光祿大夫蔡謨與冰書曰……周廷・郭璞等並亦非爲主禦難也、自平居見殺耳、皆見褒贈。（『晉書』卷六九刁協傳）

左光祿大夫の蔡謨は冰に書を與えてこう言つた。

「……周廷・郭璞らは、並びにまた主君のために國難を禦ぐことができず、何もしないまま殺されただけに、みな褒贈されています。」

とあるから、異議を唱える者もあつたようだが、これとて、郭璞らですら褒贈されているのだから刁協はなおさら評價されるべきだといふ文脈で用いられているだけで、ことさら郭璞の追贈に反對しているわけではない。むしろ、反王敦派の人々においては、王敦の横暴を強調する意味でも、それが天意にかなわない暴舉であつたことをはっきりさせ

るためにも、郭璞を忠臣の列に加えておくのが妥當だと判斷されたと考えるのが自然である。そして、郭璞と同じく、王敦に従わざるを得なかった人々にとつても、いや彼らにとつてはなおさら、郭璞が被害者であること、王敦の下でも抵抗を續けたことを印象づける方が都合がよかったものと思われる。なぜなら、郭璞に對する評價が一種の判例となり、自分の立場の評價にもつながってくるからである。

典型的な意味での忠臣でも逆臣でもなく、どう位置づけられても不思議はない人々にとつて、王敦の下に居らざるを得なかった悲劇の忠臣という形象が浸透するのは歓迎すべきことであつたに違いない。つまり、樵王や周顗、戴若思が王敦と眞つ向から對立した忠臣の代表なら、郭璞は王敦に従わざるを得なかった被害者たちの代表なのである。郭璞を嚆矢として忠義の被害者という概念が成立すれば、自分をそこに置くことで、比較的都合のよい評價を獲得できる。彼らにとつて郭璞を語る意味は大きいと言わねばならない。

(3) 王敦の亂をめぐるドラマ

『晉書』刁協傳には次の逸話を載せる。

(子) 彝字大倫、少遭家難。王敦誅後、彝斬讎人黨、

以首祭父墓、詣廷尉請罪、朝廷特宥之、由是知名。

〔晉書〕卷六九刁協傳附子彝傳〕

(子の) 彝、字は大倫、若いときに家の難(父の協の死)に遭つた。王敦が誅された後、彝は仇の一黨を斬り、その首を父の墓前に祭り、廷尉のもとに出頭して罪に服せうとした。朝廷は特別にこれを赦し、彝はこれによつて名を知られるようになった。

王敦の亂は數多の被害者を生んだだけに、刁彝の行爲には多くの人が賛同した。そしてその風潮を助長しているのが、王敦を徹底的に惡者にしようとする朝廷の意向である。善惡がはっきりしているうえに悲劇的要素が多い、さらに先に見たように「風言」が褒貶につながるとなれば、その社會がいかに物語を生みやすい状況にあつたかは容易に想像できよう。現存の記録から見ても、王敦の亂をめぐる話、

特に被害者の死に關する逸話が語られていたことは間違いない。また、そこで生まれた物語が虚實入り混じったものであるのも當然の流れであり、脚色の程度こそ異なれ、害された者は悲劇の主人公になり、復讐した者は英雄となった。『晉書』に周顗の死をドラマティックに描くのもその一つと見てよい。

俄而與戴若思俱被收、路經太廟、顗大言曰：「天地先帝之靈、賊臣王敦傾覆社稷、枉殺忠臣、陵虐天下、神祇有靈、當速殺敦、無令縱毒、以傾王室。」語未終、收人以戟傷其口、血流至踵、顔色不變、容止自若、觀者皆爲流涕。遂於石頭南門外石上害之、時年五十四。

（『晉書』卷六九周顗傳）

周顗は、まもなく戴若思とともに捕えられ、途中で太廟の側を通りかかった。顗は大きな聲でこう言った。「天地先帝の靈よ、賊臣の王敦は社稷を傾け、みだりに忠臣を殺し、天下を踏みにじろうとしています。天地の神に靈があるなら、即刻、敦をお殺しくください。惡をのさばらせて王室を傾けることのないように。」

「郭璞」説話の形成（大平）

その言葉がまだ終わらないうちに、護送役が戟で顗の口を傷つけた。血が流れて踵にまで流れたが、顔色は變わらず、容子も平靜であつた。見ているものはみな涙を流した。とうとう、石頭南門外の石の上で顗を殺した。時に五十四歳であつた。

他にも、非業の死を遂げた人、特に忠義傳中の人物には壯絶な死の話を伝えるものが少なくない。王敦に直言した畢句、笑つて「昨夜夢乗車、挂肉其傍。夫肉必有筋、筋者斤也、車傍有斤、吾其戮乎。（昨夜、車に乗つて肉を側に掛けている夢をみた。肉には必ず筋がある、筋とは斤のことだ、車の傍に斤がある、つまり私は殺される（斬）のだ!）」と言つた易雄。害されるに及んで、「人生有死、閭門爲忠義鬼、亦何恨哉。（人は生れば死ぬもの、一族そろつて忠義の鬼となろうとも、何を恨むことがあろうか!）」と豪語した虞悺。共に衆人の傷挽し號泣する中での忠臣らしい死である。事實としてみれば彼らは王敦に殺されているわけだが、「忠義」という價值觀のなかでは完全に王敦を壓倒している。「忠義」という枠組の中に置くことによって、彼らの死は救わ

れているのである。

ここで郭璞に話を戻そう。郭璞の説話を見ると、先に引いた王敦の亂の失敗を暗示するもののほかに、璞の運命、つまり自らの死の豫知に關するものが目に附く。

王敦令郭璞筮卦、曰：「明公起事、禍必不久。」敦怒曰：「卿壽幾何。」曰：「命盡日中。」引出斬之。璞曰：「當何之乎。」曰：「南山之首。」曰：「我知之矣。必在雙栢之間乎。」時有鵲巢而甚茂。（『御覽』卷九五四引蕭方等『三十六國春秋』）

王敦は郭璞に卦を出させた。璞が言うには「明公が事を起こされれば、きつと禍がすぐにやってくるでしょう。」敦は怒って言った。「そなたの壽命はいかほどか。」答えるに「わが命は正午に盡きましよう。」そこで引き出して璞を斬ることにした。璞が問う「一體どこに行くのか。」答え、「南山の首だ。」璞、「分かつている。きつと雙栢の間だろう。」おりしも鵲の巢がありたいそう茂っていた。

郭璞每自爲卦、知其凶終。嘗逢一趁走少年、便脫青絲

袍與之。此人不解其意。璞曰：「身命卒當在君手、故逆相屬耳。」及當死、果此人行刑。傍人皆爲屬求利、璞曰：「我常託之久矣。」此人爲之歔歔哽咽。行刑既畢、乃說如此。（『御覽』卷六九三引『搜神記』（續搜神記））

郭璞はいつも自分で卦を出し、自分が非命に終わることを知っていた。かつて、使い走りの少年に出會い、青い絹の上着を脱いで與えた。この少年はその意味が理解できなかった。璞はいった「わが命は結局君の手の中にあるのだ。だからあらかじめお願いしておくのだよ。」處刑のときには、豫想通りこの人が刑を行うことになった。そばにいた人はみな利を求めるように言った。璞は言った。「わたしはずっと前から託してあるのだよ。」と。この人はこれを聞いてむせび泣いた。處刑が終わってから、このように言ったのである。

これによると郭璞は自分の命の盡きる時間、場所、および死刑執行人を知っていたのだという。『晉書』は更に處

刑係の姓が崇であり、郭璞がつねに「我を殺す者は山宗なり」と言っていたという話をのせる。

そもそも王敦に殺害された人物の死には豫兆を伴うことが多い。

甘卓家金匱鳴、聲似槌鏡、清而悲。師言：「金匱將離、是以悲鳴。」尋而卓被害。（『北堂書鈔』卷一三五引『王

〔隱〕〔晉書〕

甘卓の家で金匱が鳴り、その音はまるで鏡を叩くように、清く悲しかった。師は「もうすぐお別れなので、金匱が、悲しんで泣いているのです。」と言った。まもなく卓は殺された。

元帝永昌元年、甘卓將襲王敦、既而中止。及還、家多變怪、照鏡不見其頭。此金失其性而爲妖也。尋爲敦所襲、遂夷滅。（『晉書』卷二七 五行志上）

元帝の永昌元年、甘卓は王敦を襲撃しようとしたが、途中で止めてしまった。歸還すると、家のなかに怪事が多く、鏡に映しても頭が見えなかった。これは金がその性質を失って妖をなしたのである。まもなく敦に

「郭璞」説話の形成（大平）

襲撃され、ついに滅ぼされた。

明帝太寧元年、周廷自歸王敦、既立其宅宇、所起五間六梁、一時躍出墜地、餘桁猶互柱頭。（『晉書』卷二七 五行志上）

明帝の太寧元年、周廷は自ら王敦の下に降った。屋敷を建てたところ、建てていた五間の六つの梁が、同時に崩れて落下したが、横木はまだ柱の上にかかっていた。

最初に挙げた甘卓の死には更に陳訓がそれを豫言していたという話もある。

時甘卓爲歷陽太守、訓私謂所親曰：「甘侯頭低而視仰、相法名爲眇刀、又目有赤脈、自外而入、不出十年、必以兵死、不領兵則可以免。」卓果爲王敦所害。（『晉書』卷九五藝術傳陳訓傳）

その時、甘卓は歷陽太守であったが、訓は密かに親しい人にこう言った。「甘侯は頭をたれて上目遣いで見る。看相の法ではこれを眇刀と呼んでいる。また、目には外から中に入る赤い筋がある。十年しないうちに

きつと兵亂で死ぬだろう。兵を率いなければ免れることができない。」卓はその言葉どおり王敦に殺された。

この流れから見ても郭璞の死にも豫兆があつたと考えられたのも極めて自然なことだということがわかる。さらにここで思い出さなければならぬのは、郭璞はすでに卜占の權威者となつてゐることである。その郭璞が自分の死を豫知できなかったはずはない。もちろん、占者が自分の死を豫知したという話は郭璞に始まるわけではない。『後漢書』方術傳によれば謝夷吾・郭鳳・李南の女・計子勳といった人々が自分の死を豫言している。ただ李南の女が疾風によつて死を悟り、計子勳が日中の死を豫言したなど、わずかな状況説明があるだけで、なぜ死んだのか、それがどういう意味をもつのかといったことまでは傳わつてこない。^③彼らの傳においては「術」が使えることそのものが眼目であり、それさえ傳えればもう十分なのだろう。それに對して郭璞の死の豫兆は手が込んでゐる。

まずはあらかじめ青絲の袍を處刑役人に渡していたという話をみてみよう。周りが哀惜する中で刑せられる人物が

死を達觀してゐるという構圖は忠義傳中の話と重なる。とすれば、死を目前にした郭璞の行動にも、壯語して死んでゐた忠義の士の名臺詞と同じ意味が與えられてゐるとは考えられないだろうか。もちろん、郭璞は豪壯闊達を賣りにしてゐるわけではないから、見事な辭世の句をはいて死ぬというようなことはない。未來を見とおしながら死ぬのである。郭璞はるか以前から自分が處刑されることを知つてゐた。そして、それが如何ともしがたいものであることも。それでいて王敦を諫めたとすれば、すなわちその「情」は「忠」となる。また、郭璞は己の運命を自覺すると共に王敦の行く末をも見とおしてゐるはずである。ならば郭璞は死を受け入れる事によつて王敦より高みに立つてゐることもなろう。いずれにせよ、郭璞は郭璞らしく天命を知ることによつて、意味のない死を免れてゐるのである。

次に、死期と刑場の豫言だが、『太平廣記』卷一三に引く『神仙傳』^④では郭璞は兵解して水仙になつたという。ここでははっきり尸解したとは書かれていないが、日中（正

午)の落命、南山の首、柏、鵲といった舞臺設定は明らかに仙化を暗示している。仙人になったとすれば、郭璞は殺されたふりをしてまんまと王敦を出し抜いていたことになる。こうなると、曹操の放った刺客を術を使つてするとかわした左慈の姿とも重なってくる。そして、さらに詮索を加えることを許されるなら、こうも考えられよう。まもなく死ぬ王敦は間違ひなく仙人にはなれない^③。璞の仙化と同時に、王敦と郭璞の力關係は逆轉するのである。

これまで述べてきたことを整理しておこう。王敦は郭璞の術を利用しようとしたが拒絶され璞を殺してしまう。その後、王敦が誅された時に残っていたのは、王敦に架せられた強烈な逆逆者のイメージと被害者を美化しその死に悲劇性を加えようとする動きであった。その中で人が被害者の死を語るとき、忠臣はあくまで忠臣らしく、壯士はより豪壯に、と、それらしい死の姿がおのずと模索されていった。王敦の亂に翻弄された人々にとって、彼ら悲劇の英雄の死は無意味なものではなく、その壯絶な死の瞬間は十分

「郭璞」説話の形成(大平)

語るに足るものであったに違ひない。當然「郭璞」もこの流れの中にあつた。また、郭璞は未だ處遇の決しない王敦屬官の代表でもあり、郭璞の反王敦精神は善惡定かでないかれらの立場を善の方向に印象づけるものであつた。こうして、「郭璞」は天意を知り王敦の非道とその破滅を知る人間としてのイメージを増幅させ、反亂に巻きこまれた一士人の死という現實をはるかに凌ぐ物語を創つていったのである。

結びにかえて

一つの事件が人々の話題に上るとき、人は何らかの意識(思惑)を持つてその事件を語る。「郭璞」はその意識を表現するための手段として用いられ、物語中の人物になつた。簡単に言つてしまえば、語られる事件、語る人の思惑が異なるたび、新たな「郭璞」が生まれたということになる。小論では二つの事件を核にその思惑を探つてみた。それと重なる部分もあるが、「中興神話における郭璞」と「王敦の亂における郭璞」それぞれの説話の展開と兩者の

關係を考へて結びとしたい。

「中興」期における説話の特色はその語り手（發信者）と語りの目的がはっきりしている點にある。「中興」劇のなかでの「郭璞」像の形成は政治的意圖によるものであり、「郭璞の占いは當たる」郭璞は天の代辯者である」ということを言へばよかった。この話にはディテールを附け加えることはできても、そこから發展する餘地が残されていない。語られる前から話のパターンが自明だからである。

これは、いわば射覆（透視術）の延長線上にあるもので、管輅に勝るとも劣らない才能を賞賛されるものの、そこから踏み出すことはできない。假に「中興」を突き崩す大きな政治的轉換でもあれば或いは別の話が現れたかもしれないが、東晉政權が維持されている以上、その創世神話は維持されていかなければならなかった。

一方、「王敦の亂」をめぐる話は、中興劇の中で確立した郭璞像に端を發し、そこに別の意識の流れが附け加わることによって形作られていった。つまり、「郭璞が自分の死を知らなかったわけではない」という確信が、「ならば死

を自覺した郭璞がどのような行動をとったか」「なぜ郭璞は非業の死を遂げねばならなかったか」という疑問をうみ、それを解釋すること自體が物語を創り出すことに直結していったのである。その背後に王敦に對する反發と輿論の高まりがあつたことは先に見た通りである。郭璞の死を語れば語るほど物語は積み重ねられ、「郭璞」は實態を離れて語りの中で新たな像を結んでゆく。郭璞が仙人になり、處刑役人が涙したのは、まさにその語りの力によるとも言えよう。つまり、中興神話の中で占筮に精通する人物として固定されていた郭璞の形象が、ここではいろいろな解釋の物語として展開し始めたのである。ただ、このような多様な郭璞解釋を生み出した土臺はやはり中興神話にあり、それを缺いては想像の連鎖も成立し得ないということも忘れてはならない。郭璞には一流の卜者としてのゆるぎない基礎があつたからこそ様々に語られることも可能になつたのである。

そして、この語りによって生み出された「郭璞」はさらに新たな像へと發展する可能性を持つている。「郭璞」が

堅實な卜者という枠から解き放たれば、その「術」が
いつそう現實離れしてくることも許されるからである。例
えばこんな話がある。

璞素與桓彝友善、彝每造之、或值璞在婦間、便入。璞
曰：「卿來、他處自可徑前、但不可廁上相尋耳。必客
主有殃。」彝後因醉詣璞、正逢在廁、掩而觀之、見璞
裸身被髮、銜刀設醊。璞見彝、撫心大驚曰：「吾每屬
卿勿來、反更如是。非但禍吾、卿亦不免矣。天實爲之、
將以誰咎。」璞終嬰王敦之禍、彝亦死蘇峻之難。（晉
書「郭璞傳」）

璞はもともと桓彝と親しく付き合っていた。彝はよく
璞のところに行つたが、璞が婦人の部屋にいるときに
も、そのまま入つていった。璞は「君が來たときには、
ほかの所ならすぐ入つてきてもいいが、廁にいるとき
だけは來ないでくれ。きっと二人とも禍に會うことに
なるから。」と言つた。彝は後、酔つぱらつて璞のと
ころにやつてきたが、璞はちょうど廁にいた。こっそ
り見に行くと、璞が裸で髪をざんばらにし、口に刀を

「郭璞」説話の形成（大平）

含み酒を地に注いで神を祭っていた。璞は彝を見ると、
胸を叩いてたいそう驚き、こう言つた。「いつも君に
來るなど言つておいたのにもかかわらず、こんなこと
になろうとは！私に禍をもたすだけでなく、君もま
た逃れられまい。これはまさに天がしたことだ。一體
誰を咎めることができよう！」璞はついに王敦の禍に
遭い、彝もまた蘇峻の難に死んだ。

これは桓彝が蘇峻の難に遭つてから語られるようになった
話だろうが、ここでの郭璞は王敦の禍を避けるために呪い
をしているのである。この郭璞が「易林」を解釋して進路
を選んだ郭璞から如何にずれているかは自明だろう。はじ
めにふれた胡孟康の婢や張固の馬の話もこのように「郭
璞」像が廣がりをもつてはじめて生まれえたのである。^③

こうして郭璞は歴代の方術の士と變わらぬ力を持ち、神
仙傳にも名を連ねるようになった。術士の一人となつた郭
璞は既に怪異の世界の人である。と同時に、その説話は數
ある怪異譚の一つとして語られはじめる。當初の現實との
緊張關係にあつた語りとそれを語つた人々の思惑は遠い過

去のものとなったのである。

註

- ① 『抱朴子』内篇論仙
- ② 小論で言う郭璞説話とは『晉書』卷七十二郭璞傳並びに各種類書に引かれる郭璞に關する逸話全般を指す。なお、小論は郭璞がいかに語られたを問題にしているのので、逸話の眞偽については考察の對象としない。
- ③ 『太平御覽』卷三八九引『晉中興書』曰：郭璞性輕易、不持威儀、嗜酒好色、或過度。其友人于寶常識之、曰：「此非適性爾。」璞曰：「吾所受有本限、用之恒恐不盡、乃憂爲害乎。」
- ④ 曹道衡『晉書・郭璞傳』志疑（『蘇州大學學報』（哲學社會科學版）一九八三年第二期）に胡孟康の婢の故事を考證して「所以這種故事、不但本身不足信、連據以推測郭璞的行踪亦難憑信。」という。
- ⑤ 興膳宏「詩人としての郭璞」（『中國文學報』第十九冊・一九六三年）
- ⑥ 曹道衡氏前掲論文參照。
- ⑦ 『隋書』經籍志には「『易洞林』三卷」を著録する。ここでは『玉函山房輯佚書』によった。
- ⑧ 袁山松『後漢書』光武紀論（『太平御覽』卷九〇引）：「雖曰中興、與夫始創業者、庸有異乎。」また、『晉書』卷八

二處預傳：「雖云中興、其實受命。」

- ⑨ 父の元海については次の逸話がある。「豹妻呼延氏、魏嘉平中祈子於龍門、俄而有一大魚、頂有二角、軒轅躍鱗而至祭所、久之乃去。巫覡皆異之、曰：「此嘉祥也。」」（『晉書』卷一〇一劉元海載記）また、『晉書』卷一〇四石勒載記にも「勒生時赤光滿室、白氣自天屬於中庭、見者咸異之。」という。
- ⑩ 『後漢書』卷一下 光武帝紀論：初、道士西門君惠・李守等亦云劉秀當爲天子。其王者受命、信有符乎。不然、何以能乘時龍而御天哉。
- ⑪ 『宋書』卷二九符瑞志下：（晉愍帝）建武元年十一月、木連理生武昌、大將軍王敦以聞晉王。又：晉元帝太興元年七月戊辰、木連理生武昌、大將軍王敦以聞。
- ⑫ 『宋書』符瑞志によると、「木連理、王者德澤純洽、八方合爲一、則生」という。
- ⑬ 『藝文類聚』卷四引『晉中興書』にも見える。當時の司馬睿と王氏の關係については、田餘慶『東晉門閥政治』（北京大學出版社・一九八六年）「釋『王與馬共天下』」參照。
- ⑭ 以下は愍帝建興元年から元帝永昌二年にかけての瑞兆である。

年 月	瑞兆	場所	報告者	報告先
愍帝建興元年六月	甘露	西平縣		
愍帝建興元年八月	嘉禾	襄平		

愍帝建興二年三月	木連理	朱提
愍帝建興二年三月	木連理	益州雙柏
愍帝建興二年六月	木連理	襄平
愍帝建興二年六月	嘉禾	平州治
愍帝建興二年九月	麒麟	襄平
愍帝建興二年十月	玉璽	涼州刺史張寔
愍帝建興二年十二月	行璽	民陳龍
愍帝建興二年十二月	銅鐸	晉陵武進縣
愍帝建興三年四月	赤雀	平州府舍
愍帝建興三年七月	嘉禾	襄平
愍帝建興三年八月	甘露	新昌縣
愍帝建興三年十二月	白雉	襄平
愍帝建武元年三月	白麒麟璽	丹陽江寧
愍帝建武元年四月	白雀	民虞由
愍帝建武元年五月	白鹿	尙書僕射卞協
愍帝建武元年六月	甘露	高山縣
愍帝建武元年閏月	木連理	嵩山
愍帝建武元年八月	木連理	汝陰
愍帝建武元年十一月	木連理	武昌
愍帝建武元年正月	麒麟	汝陰
元帝太興元年正月	木連理	豫章
元帝太興元年七月	白鹿	武昌
元帝太興二年四月	甘露	琅邪費
元帝太興三年四月	白鹿	晉陵延陵
元帝太興三年十一月	木連理	零陵永昌
元帝永昌元年九月	白鹿	江乘縣
元帝永昌二年正月	赤烏	暨陽

「郭璞」說話の形成（大平）

⑮ 『洞林』には甲子の歳とするが、晉王卽位の一年前のことなので丙子が正しい。

⑯ 『宋書』卷三四 五行志五（人禍）：晉愍帝建興四年、新蔡縣吏任僑妻胡、年二十五、產二女、相向、腹心合同、自胸以上、齊以下、各分。此蓋天下未一之妖也。時內史呂會上言：「案瑞應圖、異根同體謂之連理、異苗同穎謂之嘉禾。草木之異、猶以爲瑞、今二人同心、易稱『二人同心、其利斷金』。嘉徵顯見、生於陝東之國、斯蓋四海同心之瑞、不勝喜踊、謹畫圖以上。」時有識者哂之。

⑰ 淳于伯の「血逆之變」は冤罪事件であり、その責は王導にあった。郭璞がここで卦に出なかつたと言っているのは、王導を擁護する意味があつたのかもしれない。淳于伯事件と郭璞の態度については、小南一郎「干寶『搜神記』の編纂（下）」（『東方學報』第七〇冊・一九九八年）第四章二「怪物を産み出す社會」に詳しい。

⑱ 丁丑から禪代の庚申の年まであわせて百四年であるが、丁丑の始めはまだ西晉であり、庚申の終わりは宋になっているので、その二年を差し引けば百二年になる。

⑲ 實際、郭璞の占が絶対に適中することが認められ、中興が確立してしまえば、詳細はさほど重要ではなくなっているようだ。例えば、晉陵の銅鐸の件に關しては孫盛は「五馬浮びて江を渡り、一馬化して龍と爲る。」という童謡に引きよせて「五鐸」が見つかったとしている。『類聚』卷一三引

『晉陽秋』曰：太安中、童謠曰：「五馬浮渡江、一馬化爲龍。」永嘉大亂、王室淪覆、唯琅琊・西陽・汝南・南頓・彭城五王獲濟。至是中宗登祚、先是五鐸見于晉陵、靈數玄感、若合符契。

- ⑲ 『晉書』郭璞傳並びに二十卷本『搜神記』卷十四に見えるが、もともとの『搜神記』にあつたものかは不明。

- ⑳ 例えば、『晉書』郭璞傳に「時有鼯鼠出延陵、璞占之曰：『此郡東當有妖人欲稱制者、尋亦自死矣。後當有妖樹生、然若瑞而非瑞、辛螫之木也。儻有此者、東南數百里必有作逆者、期明年矣。』」という記事があるが、鼯鼠については、『爾雅』釋鳥に郭璞の注があり、その形状や性質について詳しく描寫している。

- ㉑ 蔣凡『世說新語研究』（學林出版社・一九九八年）第五章「義理新注玄家《易》」第二「陰陽消息紛爭多」

- ㉒ 『史通』内篇書志曰：王隱後來加以瑞異。

- ㉓ 郭璞の文章の華麗さについては、衆目の一致するところであつた。『文心雕龍』詮賦篇に「景純綺巧、辭理有餘。」といい、江淹が五色の筆を郭璞に返した途端、美句を綴れなくなつたという逸話（『南史』卷五九江淹傳）を残す。なお、郭璞の文學については興膳氏前掲論文に詳述されているので、ここではこれ以上ふれない。

- ㉔ 『御覽』卷六七に引く『桓彝別傳』に「彝字茂倫。明帝世、彝與當時英彦名德庾亮・溫嶠・羊曼等共集青谿池上、郭璞預

焉、乃援筆屬詩、以白四賢并自序。」とある。また、郭璞には「贈溫嶠」詩がある。

- ㉕ 甚だしくは文章によつて符瑞の意味が全く異なつてしまふこともある。例えば、太康六年荊州から兩足の虎が送られてきたとき、王鈴が瑞兆であるとして「般般白虎、觀釐荆楚。孫吳不逞、金皇赫怒。」という文を作つた（『類聚』卷九九祥瑞部下引王隱『晉書』）のに對して、王鈴は詩歌を作つて諷諭したという（『開元占經』卷一一六引王隱『晉書』）。王鈴の解釋によれば、『晉金行也、金在西方、其獸爲虎、虎有四足、猶國有四方、無半勢、而又見獲、將有懷愍之禍也。」ということになるのである。

- ㉖ 例えば、『抱朴子』内篇勸求に「世間自有奸僞圖錢之子、而竊道士之號者、不可勝數也。然此等復不謂挺無所知也、皆復粗開頭角、或妄沽名、加之以伏邪飾僞、而好事之徒、不識其眞僞者、徒多之進問、自取誑惑、而拘制之、不令得行、廣尋奇士異人、而告之曰、道盡於此矣。」という。

- ㉗ 『北堂書鈔』卷一二四に引く『語林』には、長矛で刺された周顒が「王敦、小子也」と罵つたという話を載せる。この場面も様々に脚色を加えて語られていたのだろう。

- ㉘ 『北堂書鈔』卷一二九『太平御覽』卷七八二には『續搜神記』に作る。なお現行本『搜神後記』卷二にも収める。

- ㉙ 『後漢書』卷八二下方術傳計子勳傳：計子勳者、不知何郡縣人。皆謂數百歲、行來於人間。一旦忽言日中當死、主人與

之葛衣、子動服而正寢、至日中果死。

『後漢書』卷八二上方術傳李南傳：南女亦曉家術、爲由拳縣人妻。晨詣鬻室、卒有暴風、婦使上堂從姑求歸、辭其二親。姑不許、乃跪而泣曰：「家世傳術、疾風卒起、先吹竈突及井、此禍爲婦女主爨者、妾將亡之應。」因著其亡日。乃聽還家、如期病卒。

③① 澤田瑞穗氏は「卷九の郭璞傳は舊本にあったものではなく、おそらくは唐以降において紛れこんだもの」とされる。（平凡社『列仙傳・神仙傳』解説）

③② 日中の仙去については、吉川忠夫「日中無影——戸解仙考——」（『六朝古道教史研究』（同朋舎・一九九二年）所收）参照。

③③ 仙人になるには道德的修養が必要とされた。例えば、『抱朴子』内篇對俗に引く『玉鈴經』中篇に「欲求仙者、要當以忠孝和順仁信爲本。若德行不修、而但務方術、皆不得長生也。」という。

③④ 郭璞をめぐる話が荒唐無稽の度合いを強めてゆく過程については「志怪」觀の變化や「志怪小説」集の編纂などともかからめて考えねばならないだろうが、それは今後の課題としたい。